Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

信長の霊廟建築としての安土城 ： 八角形の造形とユリウス二世廟からの考察

原, 陽子

(Citation)
美術史論集,18:129-147

(Issue Date)
2018-02-23

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041497

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041497

KOBE UNIVERSITY

研究ノート

信長の霊廟建築としての安土城

―八角形の造形とユリウス二世廟からの考察―

原　陽子

《キーワード》八角形　ローマの七大教会　ユリウス二世廟

はじめに

内藤昌氏が『国華』に掲載した論文「安土城（下）」の「結章―造形の史的意義」で、「安土城天守は、軍事を第一の機能とする旧来の常識から遠く離れた存在であったよう」で、慶長期の天守が軍事第一の機能をもつようになった点を指摘し、専制者の神格化としての造形は豊国社と東照宮が安土城以上の荘厳華美をもって建立され、「むしろ安土城天守における造形の思想的本質は、そうした霊廟建築に継承されたとみるべきだろう」と最後に述べている。その前の二十三頁では、『天主指図』によると地階の宝塔の前に一段高い部屋があり、格子窓を透かして宝塔を拝む祈祷所の類かとまで記述しているが、安土城天守は霊廟建築であるとは結論づけていない。安土城天守は霊廟建築なのか。これを八角形の造形、そして当時日本に滞在していた宣教師が教育を受けたローマにある七大教会、そしてユリウス二世廟から考察するのが本稿の主旨である。(1)

一　要塞城と宮殿城

まず、安土城天守は軍事第一の城ではない点から考察をはじめる。西洋中世の城は防御性と居住性を兼備した城であったが、十五世紀後半から防御を第一とする要塞と、居住を第一とする邸館に分離していった。前者を要塞城、後者を宮殿城、本稿では特にイタリアのルネサンス式邸館との関連からパラッツオまたは宮殿と呼ぶことにする。(2)要塞城と安土城の関連については拙稿ですでに考察したので、本稿では宮殿との影響関係に絞る。(3)

十六世紀に入るとカトリック改革として、民衆に広くローマの壮麗さを見せ、その正統性を知らしめようとローマの再整備が加速され、また教皇とその一族等が造営事業で権勢を誇示しその名を永遠にとどめようとしていた。宮下規久朗氏によるとその造営は大きく三種類に分けられ、まず居住空間としてローマ市内の中心部のパラッツオ、別荘としての郊外や丘陵地のヴィラ、そして一族の礼拝

堂や埋葬用教会がそれである。[4]なかでもパラッツオは重要な装置で、三階中庭形式、大きな庭園や吹き抜けをもち、祝宴用の大広間があった。この宮殿と埋葬教会等は次第に複合施設として建設されるようにもなり、宮殿以外の建物にも三階中庭形式が採用されている。天正遣欧使節が謁見した教皇グレゴリウス十三世を称える印刷物の縁取りにある建物ほぼすべてが三階建である（図1）。この形式が日本にも持ち込まれ、宣教師により都の南蛮寺や安土や九州のセミナリヨ等が建設されたのだろう（図2）。図1の縁取り最上段中央がイエズス会のローマ学院、右側上から二段目以下、府内コレジオ、有馬と安土のセミナリヨ、臼杵の修道院ですべて三階建である。本来ハドリアヌス帝廟であったサンタンジェロ城（図3）を、『デ・サンデ天正遣欧使節記』は、地下道で教皇居住宮殿に接続された城



図1　教皇グレゴリウス13世像

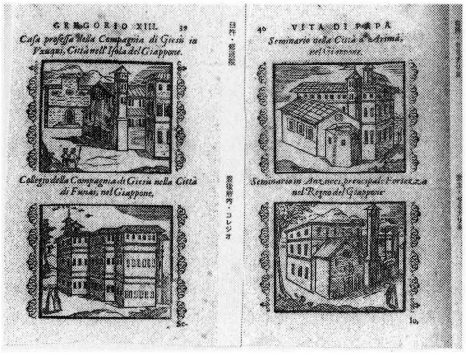


図2　臼杵・修道院、府内・コレジオ、有馬と安土・セミナリヨ

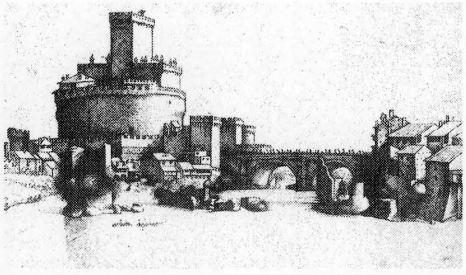


図3　サンタンジェロ城　1495年頃、『コデクス・エスクリアレンシス』中の素描、fol.26

塞であるとし、要塞城には城の言葉を、教皇居館には宮殿を使用している。[5]すでに織田信長には、岐阜城で防御第一の山頂の城と、武家儀礼に則った足利将軍邸に類似した四階建の山麓居館に分離するという先見性があった。この流れからすると、安土城天守は要塞城ではなく居住を第一とする十六世紀ローマの三階中庭式宮殿を考慮にいれて構想したと推察できよう。そして信長は居住部分を四階から三階に減らした。内藤氏も一階から三階までは近世武家殿舎の先駆的様相が読み取ることが出来るとしている。安土城天守は何よりも居住性を第一とする特異な宮殿城とすると、内藤氏が安土城天守は軍事第一の城ではないとしたことが理解できる。以後本稿では便宜上天守を省略し安土城の名称を用いることにする。

二　日本の八角形の造形建造物

安土城は現存しないが、その五階は八角円堂であった。管見の限り八角形の造形視点からの考察は先行研究にないと思えるので、この視点からなぜ信長が八角円堂を採用したのかを考察してみたい。

（一）天皇の八角墳墓

古代中国では宇宙空間を八角形でとらえる思想があり、これを図式化すると、中心が太一即ち宇宙最高神で、四番目の円周から外にあるのが「八卦」、それから「八節」・「八風」・「八方」である。この八角のそれぞれがあまねく八方に通じることを象徴して、地上の皇帝が宇宙最高神である天に政治上の成功を報告する「八角壇」を創出し、封禅という国家祭祀を行っていた。明の永楽帝時代には北京に皇帝が天と交信する天壇が創建され、足利義満も封禅を想起させる祭りを行っていた。また天上の神々と地上の死者の世界とは常に相似形で考えられ、地上の皇帝は死後も八角墳墓で永遠の憩いを楽しむと説かれた[6]。日本は七世紀後半になると中国・朝鮮からの侵略危機があり、抜きんでた大王、即ち天皇中心の中央集権国家をつくる必要から、天皇の存在を視覚化するための装置として、天皇固有の八角墳墓が創出された。こうして天皇の位を象徴する高御座も天皇の輿も八角形になったと考えられる[7]。

（二）貴人の追善堂としての八角円堂

日本の八角円堂には相輪がなく、五重塔には相輪がある点に注目したい。相輪は下の方から承露盤、伏鉢、請花、九輪、水煙、竜車、宝珠の順で構成され、相輪の下に心柱がたつ。この形式はほぼそのまま中国から輸入された。中国には仏教伝来以前、道教の神仙思想に基づく臺と称する高層建築があった。漢の武帝がこの神仙を招く臺である通天臺の上に承露仙人掌をつけさせた。この漢代の承露盤は雲の表面の露を受けるための銅盤で、玉屑とまぜて服用することで神仙に近づこうとした。外観は銅の仙人が掌をさしのべ玉杯をかかげた形である（図4）。しかし南北朝に仏陀が神仙と同格視され、仏塔が高層化し、仏塔の承露盤は露を受ける必要はなくなり、甘露

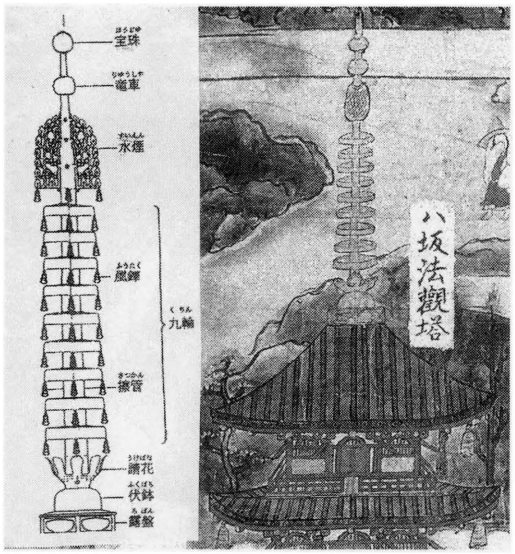


図4　《法観寺参詣曼荼羅》の八坂法観塔の相輪と相輪図

が降り注ぐ場、すなわち為政者の徳を示す瑞祥が発現する場となることが期待されるようになった。こうして仏教と王権が接近した。甘露は祥瑞であると同時に仏典では不死を意味し、甘露のもつ不死のイメージは須弥山の兜率天への往生信仰と重なった。こうして仏教の天への往生信仰と中国固有の不死の世界への昇天思想とが結びつき、仏塔は塔上に露盤をのせ不死の世界へいざなった。[8] また仏塔は仏舎利信仰を受け継ぎ、基壇または地下に石室（地宮）を、相輪中または頂部に孔（天宮）を穿って仏舎利を奉安した（図5）。[9] こうして地と天が繋がった。日本の五重塔も勿論、地と天を結ぶ塔である。スペイン人でイエズス会士である現代の研究者グティエレスは日本の五重塔は仏陀の象徴だけでなく宇宙の象徴であり、『法華経』の「見宝塔品第十一」にある、塔が湧出した大地を四角形の基壇で象徴し、その中心を宇宙の軸（Axis mundi）を象徴する心柱が露盤まで通り、地と天とを繋ぐとし、ミルチャ・エリアーデが著書『聖と俗』で、世界のあらゆる大宗教には同様の思想があると述べている。[10]

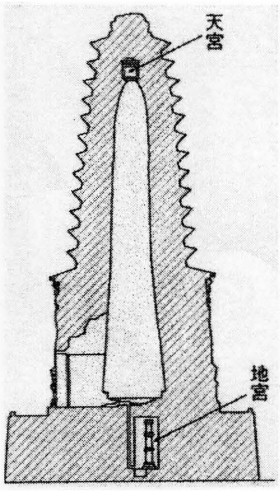
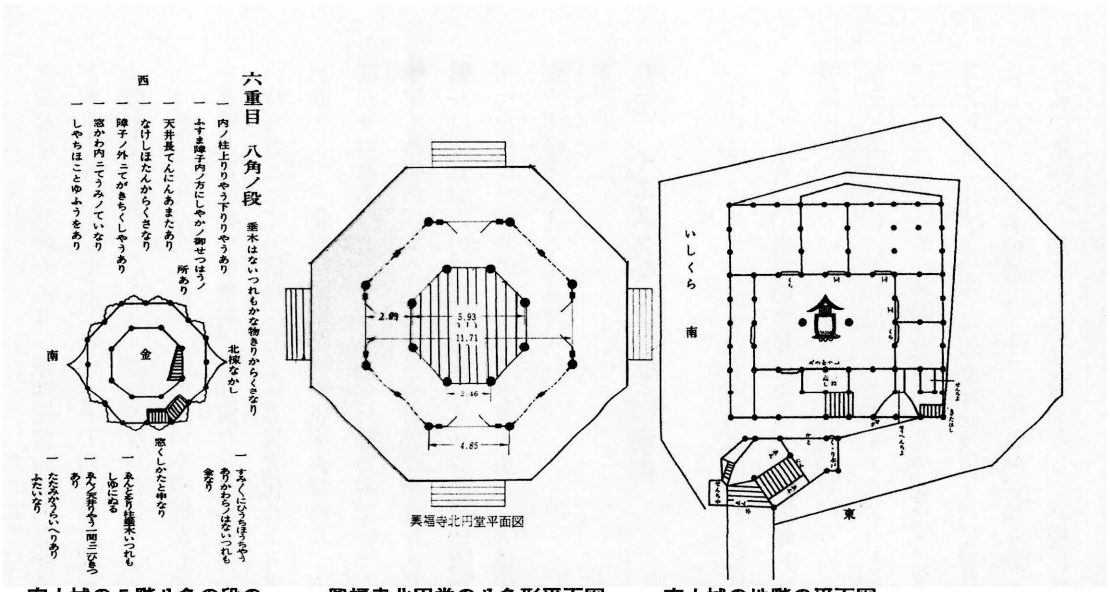


図5　中国朝陽北塔の断面図：天宮と地宮

次に日本の八角円堂にはなぜ相輪がないかを考えてみる。古代中国で高僧や皇帝のための塔が盛んに造営されたが、釈迦の舎利を納める相輪を頂く八角仏塔の形式は、たとえ皇族のための塔としても造営は困難であった。そこで『大般涅槃経後文』に塔の層数は修行の位がひとつ下がるごとに層数も減るとあることをふまえ、八角塔の層数や九輪の数を減らして、つまり塔の層数を一層、相輪の大半を占める九輪をなくし、露盤と宝珠を頂くだけの八角円堂にしたとする説がある（図6）。そして釈迦の五重塔とは区別して、貴人のための堂として日本の八角円堂が誕生したとしている。[11] また天皇の八角墳からも着想をえて、天皇と外戚関係にある藤原氏の永遠の憩いを楽しむ堂として八角円堂がまず興福寺と栄光寺に建立されたのだろう（図7）。のちに建設された夢殿も聖徳太子の威徳を讃える


図6　興福寺北円堂の露盤と宝珠



安土城の５階八角の段の平面図
（池上右平による「天守指図」静嘉堂文庫蔵）

興福寺北円堂の八角形平面図

安土城の地階の平面図
（宝塔の前に「丸きかうし」と「一段高し」の部屋）

図７　興福寺北円堂平面図

霊廟であり、その後も八角円堂は塔本来の追善堂として機能した。つまり、八角円堂は貴人の追善堂である。

（三）信長の天と興福寺

信長の建築ブレーンであり遣明使として明の建築物を実見していた策彦周良から、信長は右の知識を得ていたと推察できる。信長は幸若舞の「敦盛」を好んで舞った。下天は信長の天であった。また戦国大名の精神的支柱であった天道思想も天の秩序を至高の原理とした。信長の幼少時からの学問の師であった禅僧沢彦宗恩が、周の文王が岐山にあって天下を平定した故事から選んだ印文「天下布武」の天、そして『老子経』にいう「清浄は、天下を正す」による年号「天正」の天でもある。仏教のみでなく、より高次の儒・仏・道の三教一致の天の思想は、中世武士道の要諦になっていた。南下玄興は「安土山ノ記」で、安土城をこの三教が説く理想境として、宇宙創造の主＝梵天王、さらに須弥山上の善見城で仏法を守護する帝釈天の金殿玉楼、神仙の住む蓬莱山等に譬えた。また同じ思想から、安土城の居住階に不老長寿の仙桃を与える西王母や、死して天に昇り星に化したといわれる名宰相傳説等の絵が選択されたのであろう[12]。

そして八角円堂のある興福寺は、現在の境内からは想像しにくいが、当時は約一万八千坪の七堂宇が揃った大伽藍で、子院は百五十を超え、ルイス・アルメイダ修道士はその広大さと壮麗さをベレンの修道院と同じくらいだと報告していた。創建時には平安内裏の殿

舎を移築した建物があり、銀閣造営の世阿弥が改修した庭をもつのが興福寺の一乗院であったが、その門主は足利義昭であった。信長は彼を支え上洛したあと、将軍となった彼を追放した。その間、信長は都の文化や西洋世界との出会いを契機として、見る人に限りない感動と畏敬の念を喚起する壮麗な建築物の持つ力に気づき、新しい統治者としての構想を安土城で視覚化しようとしていた。[13] その着想源として、藤原摂関家発祥の建築物であり、天皇家や将軍家とも関わりのある壮麗広大な興福寺は魅力的であったにちがいない。なかでも藤原摂関家を彷彿とさせる煌びやかな人目を惹く八角円堂に信長は注目したのではないか。本能寺の変の直前に家康を安土城に招いた折に、初めの舞として幸若大夫に「大職冠」を舞わせたことがその証といえるだろう。

三　イエズス会宣教師と印刷術

信長はイエズス会士と六十回以上会見し、西洋の情報をえていた。イエズス会は、信長の生年である一五三四年にモンマルトルの丘で誓願をしたことにはじまり、一五四〇年パウルス三世が正式認可を伝え、海外布教に乗り出す。このイエズス会というのはどういう教団なのだろうか。通例スペイン語で修道会を表す言葉として el orden を使用する。ところがイエズス会は Compañía de Jesús と称した。その名の通り、キリスト教植民地を新しく全世界に設けるための軍団で、修道士を布教戦士として高度に訓練し、生命をあらゆる危険に晒しても厭わない、殉教をよしとする戦士を育成した。また彼らは当時のカトリック世界における最先端の学術・教育施設であるイエズス会学院に入学し、最高水準の高等教育を受けたヨーロッパきっての精鋭頭脳集団であった。一方、活版印刷の技術は驚くべきスピードで拡散し、その果たした役割は大きい。当時のローマは古代復興ブームでさまざまな古代遺跡が見直され、巡礼者用のガイドブック『古代ローマ遺物の眺望』や、一五五四年にはアンドレア・パラーディオが手のひらサイズの「ローマ古代遺跡・教会案内」を出版していた。[14] 使節はこのローマの不思議についての本や古都ローマの姿を図に彫った有名な絵を日本へ持ち帰っている。グティエレスが信長に見せた西洋の城のスケッチもこういう類の印刷物であっただろう。[15] また大衆向けの読み捨てパンフレットが印刷されるようになり、イエズス会は布教活動にこのメディアの力を最大限に活用していった。[16] 実際、天正使節が教皇に大友宗麟等の書状を手渡したあとの、神父ガスパル・ゴンサレスによる返礼としての演説は、その内容をあらゆる人が確かめられるようにと印刷され、使節にも手渡された。[17] ヴァリニャーノやオルガンティーノは、こういう状況下のローマ学院で最先端の学術を修学し、高度に訓練されたエリート軍団の戦士として猛烈なエネルギーと勢いで日本にやってきた。前者は『日本布教長心得』で「主要な土地ではわれらの建築様式による美しい教会を建てるべきである」と述べ、南蛮寺の設計をした後者は「都に七つのローマ・バジリカ風の壮麗な教会を建てたい」と願っていた。[18]

四　ローマの七大教会

ローマにはヨーロッパ各地から夥しい数の巡礼者が訪れ、ガイドブックを片手に古代遺物や教会を巡った。図8にある多数の高い塔は巡礼者の道標にもなった。トラヤヌス帝の記念円柱の頂部には帝の遺骨が黄金の骨壺に入れて安置され、サン・ピエトロ聖堂のオベリスクの天頂のブロンズ球体にはユリウス・カエサルの遺灰が納められているとされた。またサン・パオロ門の側には墓廟であるピラミッドがあった。これらローマの高い塔は皇帝の記憶を残す記念碑であると同時に一種の墓廟でもあった。そして巡礼者は必ず参拝すべしとされたのが、教皇が特権を与えた七大バシリカ即ちローマの七大教会で、聖年のミサに参加すれば全贖宥を得られるとされ、また聖年でなくてもなかにはエルサレムやコンポステーラを巡礼した際に得られるのと同量の贖罪が得られるとされた。図9が一五七五年の七大教会図で、パラーディオの「教会案内」の順路に従うと、①がサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ、②サン・ピエトロ・イン・ヴァティカーノ、③サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ、④サンタ・マリア・マジョーレ、⑤サン・ロレンツォ・フォーリ・レ・ムーラ、⑥サン・セバスティアーノ・フォーリ・レ・ムーラ、⑦サンタ・クローチェ・イン・ジェルサレンメである。コンスタンティヌス帝は、戦勝を約束してくれたキリストとその教会の勝利を宣言するために、新しい神の力を目に見える形にし、人々に強烈な印象を与えようとした。最初に寄進したのがラテラーノ聖堂で、縦九十八メートル、横五十六メートルという壮大な規模であった。従来の質素な信徒集会所（ティトゥルス）を打破し、それまでの宗教建築にはない、人々が集まる公共施設であるバシリカを採用し（図

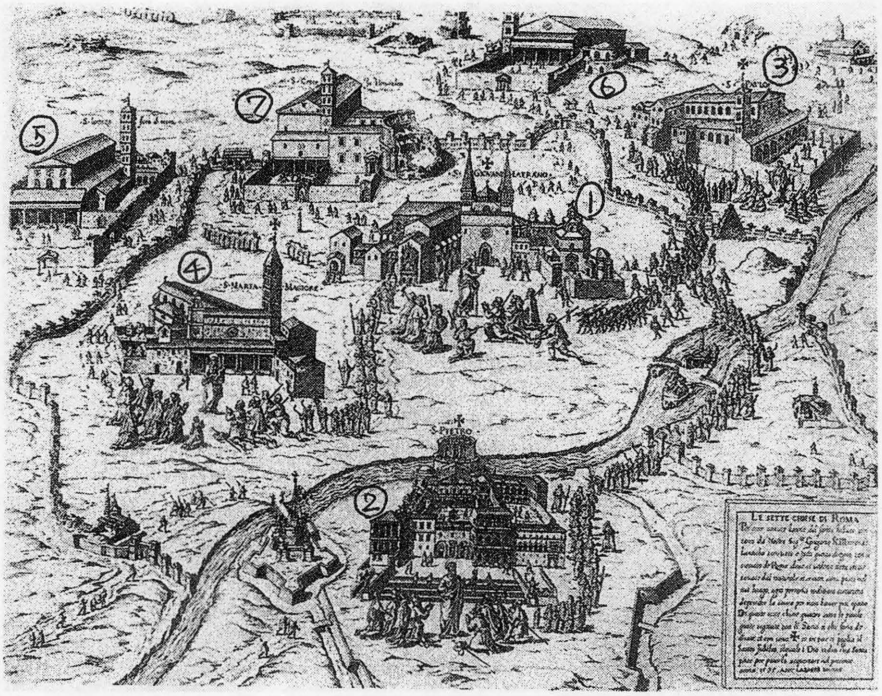


図9　ローマの七大教会、1575年、A.Lafréryによる銅板画　（番号は筆者による）

10)、王者キリストの謁見の間として天井の高い大広間を基本とした巨大で豪華な聖堂とし、次々と遥か遠くからでも眺望できる巨大バシリカが建造されていった。一方それは聖人の墓地を屋根で覆うことでもあった。こうして聖ペテロの墓を覆う墓地バシリカは、ラテラーノを超える規模になった[19]。ペテロの殉教は信仰の勝利となり、「ガイウスのトロフェーオ（戦勝記念）」と呼ばれるつつましい祭壇がペテロの墓とされ、その真上に建設された（図11）[20]。その後このサン・ピエトロ教会が「すべての教会の母」とされ、一三七七年には隣接してヴァティカン教皇宮殿も建設された。サン・パオロ聖堂ではロヨラが修道誓願を立て、異教の闘いの闘士とされた聖パウロに倣いイエズス会の活動を開始した。サンタ・マリア・マジョーレは四世紀の伝承である「雪の降るところ、聖母の教会を建てよ」との教皇への夢告から建設され、マリアがイエスを抱く「雪の聖母マリア」像は日本でも禁令下の切支丹が信仰し踏み絵にも用いられ、またそのメダイが近年九州で発見されている。新村出によれば十七世紀の京都でも「雪の聖母マリア」の日が祝われていたという[21]。エフェソス公会議でマリアを神の母と公認したことから再建設され、教皇が主の生誕を祝う教皇の教会である。オルガンティーノはこういう伝承等とともに七大教会建築の壮麗さを信長に口を極めて褒め称えたであろう（図12）。そして キリスト教の教義にも関心を示していた信長に、七大教会は布教のためには命も厭わずローマで殉教した聖人、崇敬された聖人の墓の上に建立された寺だと繰返し語ったことであろう。オルガンティーノの真の願いは、都でキリストのために殉教する日本人信者たちの墓の上にローマのような七つの教会を建てたいということだったのかもしれない。

そこで七大教会とは何かとあらためて問うてみよう。基本的には、

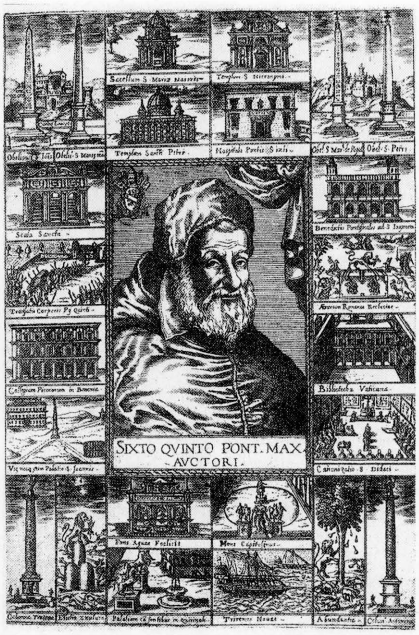


図8　シクストゥス5世の都市建設事業を描いた16世紀の版画

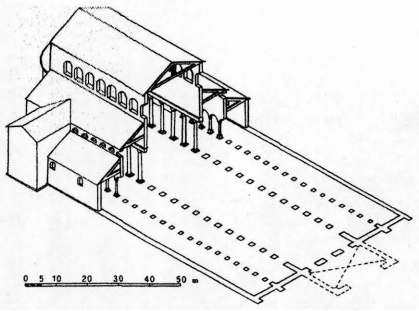


図10　ラテラーノのバシリカ、Waddyによる復元

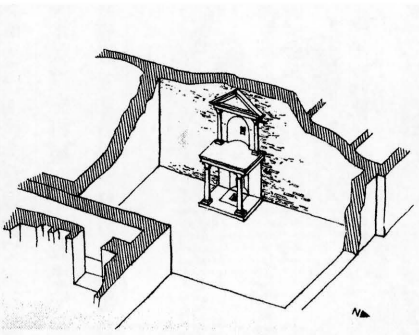


図11　サン・ピエトロ、2世紀の祠（トロフェーオ）の復元

信者が集まり、洗礼、聖体、告解など、七つの秘蹟にあずかるところである。しかし信長が注目したのは、教会は霊廟でもあるということだったのではないか。あまりにも当たり前のことなので見落としてしまいがちであるが、教会は霊廟ともいえる。聖人の墓廟がありそれを記念し礼拝するために献堂された。そして信長も現代のわれわれとはとは全く別の視点から西洋の教会を解釈し、教会は霊廟でもあり同じく記念柱のような高い塔も墓廟であると、そしてまた五重塔は舎利塔で釈迦の霊廟であり、八角円堂も死者の冥福を祈る堂であると、その本質・本来の機能を直感的に理解したのではないか。

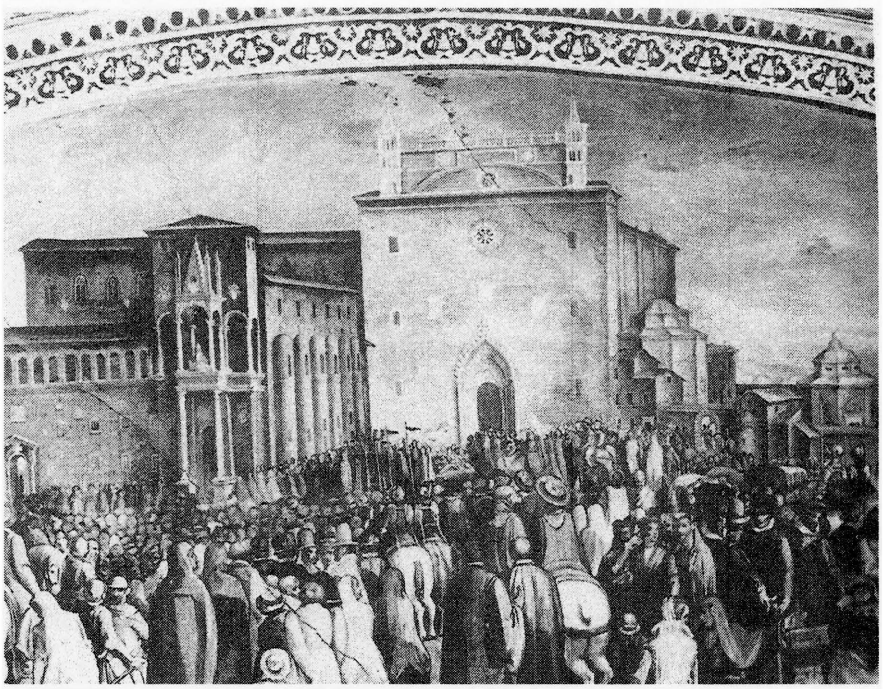


図12　ラテラーノ広場と教会（13世紀のバシリカ翼廊部と宴会堂）、1588年以前、ヴァティカンのフレスコ画の一部

五　西洋の八角形の造形建造物

七大教会には八角形の造形物がある。これを考察してみよう。

（一）再生・復活としての八角形―洗礼堂・霊廟・聖遺物堂

最初の洗礼堂がラテラーノ教会にあり、八角形である（図13と図14）。サンタ・マリア・マジョーレなど五世紀の教会のほとんどに洗礼堂が設けられた。古代以来、洗礼堂や霊廟といった宗教的記念堂には異教かキリスト教かを問わず、伝統的に八角形が好んで採用されてきた。そして集中式の聖堂建築では、円形、八角形、十字形など点対称の平面構成をとるが、これは古代の墓廟建築に由来し、円形堂は古代以来墓にふさわしい形状とみなされ、キリスト教でも墓という意味を保っていた。[22] サン・ピエトロ聖堂再建計画の初期案は、八角形の大ドームを中心におく集中式平面であった。これについては後述する。キリスト教神学に於いてはこれを正当化するため

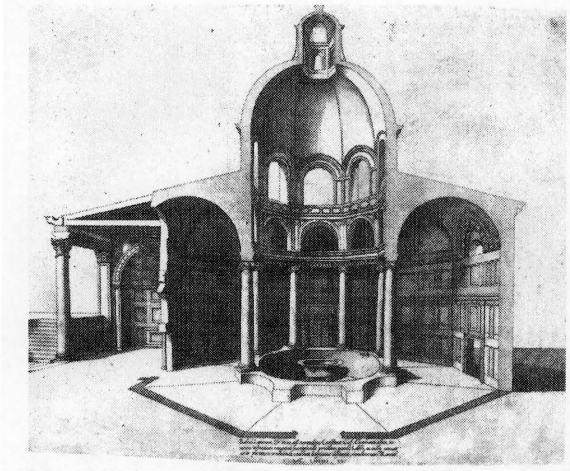


図14　ラテラーノ洗礼堂、1560年頃の復元、A.Lafréryの銅板画

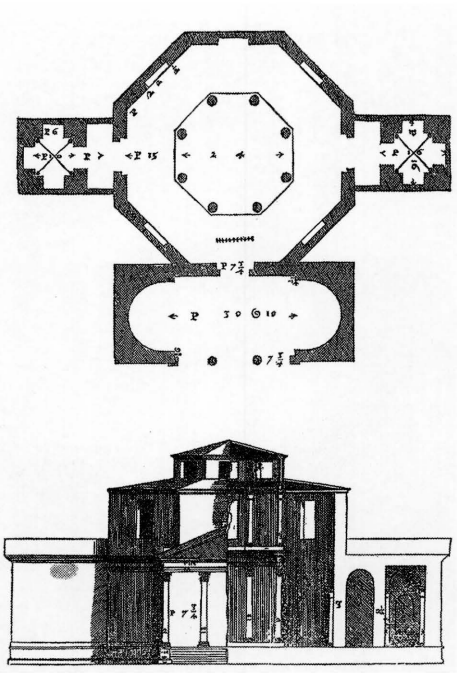


図13　サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ教会、八角形の洗礼堂平面、木版画パラーディオ『建築四書』1570年より

に、八は天地創造から世界の開始までの日数であり、キリストが復活するまでの日数だと説かれ、現世で生まれ変わる洗礼堂や天国で生まれ変わる霊廟は、生まれ変わる・復活するという共通項で八角形になったのだろう。

その間、第二十五回トレント公会議で新教の聖像否定に対して、聖人崇拝や聖遺物崇敬の伝統が再確認されたことから、スペインでは聖遺物収集が中世以上に盛んになり、宗教建築に聖遺物堂が献堂されるようになった。フェリペ二世が擁護したグアダルーペ修道院では、十六世紀末に天井の高い八角形の聖遺物礼拝堂が造営され、棚には多数の聖遺物が展示された。一六三〇年代にはトレドの大聖堂で同じく八角形の聖遺物堂建設を開始、またカトリック両王の墓があるグラナダの王室礼拝堂では遺物棚が新設された。[23] 遺物堂の平面に八角形が採用されたのは、伝統に基づいた死者を祀る霊廟に倣ったからであろう。要するに、日本の八角形と同じく西洋の八角形の造形も、死者礼拝や霊廟に関連がある。

(二) 天の象徴としての八角形―八角形ドームと天の女王マリア

異教の古代以来、交差ヴォールトや八角ドームを含むドーム一般は広く天の象徴とされ、中世キリスト教神学では神の完全性や天国の象徴ともされた。[24] それは古代ギリシャ以来伝統的に図形に象徴的な意味合いが読み込まれてきたからで、円は天の穹窿を象徴し、四角は広漠たる大地、八角形は天と地を結ぶ媒介記号とされたからである。これを組み合わせると、四元素や宇宙の構成、錬金術の原理

などを表すことができるとされ、四角形に内接する円という図形は、天と地の咬合・照応を表象して八角形となり古くから用いられてきた。こうして数字の八は伝統的に天と結びつけられた[25]。プトレマイオスの天文体系では、地球を中心に外側を月、太陽、水星、金星、火星、木星、土星の七天球が回転し、もっとも外側の恒星天球は神が動かしていると信じられていた。この第八天を恒星天とし、八は夜空の星の世界とも考えた。また、ルドルフ・ウィトカウアーによると、八角形は星空を支配する天界の女王マリアを象徴するとされ、聖母マリアに捧げられた聖堂は八角形の集中式平面を採用することが多かった。海を渡ったメキシコにも八角形で天空を表現した聖堂がある（図15）。新プラントン主義では円がもっとも完全な形態とされ、円形平面のドームが八角形のそれ以上に聖堂に好ましいとされた。また、パラーディオは「われわれが造る小神殿（聖堂）は大神殿たる宇宙に似せて造るべきだ」とし、聖堂はミクロコスモスであり、宇宙の調和に呼応すべきもの考えられ、ウィトカウアーは、

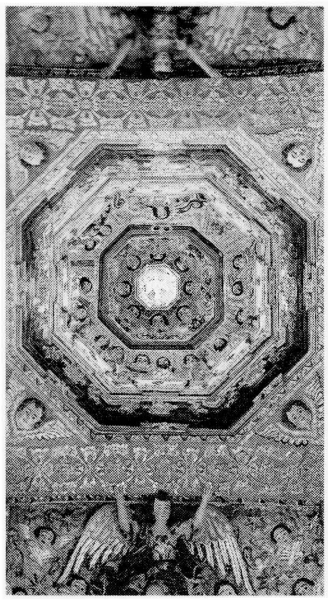


図15　ロレートの処女マリアの間の八角形のクーポラを下から見た図、サン・フランシスコ・ザビエル・イエズス会修練教会 Tepotzotlán, México

球形ドーム建築は神の完全性、神の神髄を反映し、同時に顕彰するものとした[26]。しかし、円形でも八角形でもドームは天・宇宙の象徴であることにはかわりはない

この天動説に関連して天正使節がおかれていた状況をみてみよう。『使節記』によると使節がトレドで時計仕掛けを見たのは一五八四年である。第八天を恒星天とする説で、時計細工の時の刻み方の技術が説明されている。一六世紀初頭パドヴァ大学で医学と占星術を学んでいたコペルニクスは一五四三年頃から地動説を唱えていた。そして同じ頃に造営され、ヨーロッパ最古の公的学術庭園とされるパドヴァ植物園を使節は訪れている。その園長でドイツの植物学者メルヒオル・ギランディーヌ Merchoir Guilandinus から四冊の立派な書物の贈物があった。その第一冊にアブラハム・オルテリウスが編纂した「世界輿地図」、残りの三冊には世界の有名な町の図があった[27]。これを日本へ持ち帰ったのは周知のことである。当時『世界舞台』の補遺版を準備していた地誌学者オルテリウスに、アントワープでは入手不可能な地図や情報を提供していたのが、一五八九年から一五九二年の約三年間をローマで過ごしていたフランドル人フィリップス・ファン・ウィンゲであった（図16）。彼こそ信長が狩野永徳に描かせた《安土山図屏風》をヴァティカンの地誌廊でデッサンしていた人物である。使節が訪問した頃の西洋では、信長の戦時と平時における功業は盛んに取りざたされ、信長ほど素晴らしい評判を獲得した日本人はほかにいないとされた。そして、

フアン・ウィンゲは信長を日本の神と認識し、安土城を日本の神々の神殿群としてデッサンしていたのである（図17）[28]。

話を元にもどすと、そういう最新の施設に日本の四少年が招かれたということだ。ローマ学院でヴァリニャーノたちが学んでいた頃の一五六五年に、数学講座を担当していたクリストーフォロ・クラビオは、その後のイエズス会の数学や天文学に大きな影響を与えた（図18）[29]。こういう事実からも、占星術や天文学の知識を有した宣教師が、使節にこの知識を伝授しようとしていたことが分かる。信長は宣教師に岐阜城では三時間にわたり四大の性質・日月星辰等について質問し、少し後の本能寺の変前にはグレゴリオ暦問題を意識し、南蛮渡来の天文学に通じていた曲直瀬道三等に閏年を設けるための暦の計算をさせていた[30]。この状況下で信長は西洋の八角形は天の象徴だと解した可能性はある。

都でオルガンティーノが建設した通称南蛮寺は、正式には「被昇天の聖母教会」と称し聖母に捧げられた教会である。聖母は死後霊魂と共に肉体も天に召され、天上で冠を授けられた。その姿を、星空の下「天の女王」として表現した《聖母戴冠》のモザイク画が、



図17　フアン・ウィンゲによる安土城のデッサン『西洋古代神話図像大鑑【続編】』所収



図16　フィリップス・フアン・ウィンゲ肖像『西洋古代神話図像大鑑【続編】』所収



図18　数学者・クリストーフォロ・クラビオ像　1606年　ローマのイエズス会古文書館

サンタ・マリア・マジョーレ聖堂にある。また聖母はキリストが地上に残した「母なる教会」を象徴し、使徒たちの精神的な母であった。地上の人々の祈りを天の父に取りつぎ、天と地を結ぶ人であった。こういうイメージを視覚化したものに、イエズス会の大パトロンであるファルネーゼ家の本拠地パルマ大聖堂の《聖母被昇天》がある（図19）。八角形の枠のあるクーポラにコレッジョが描いた。南蛮寺は安土城とほぼ同時期に建築されており、普請好きで建築図面も読めた信長が、その建築様式について仔細に説明を求めた可能性は否定できない[31]。この上なく壮麗である西洋の八角形も日本と同じく天を象徴し、天と地を結ぶ造形であると信長は考えたとしていいのではないか。

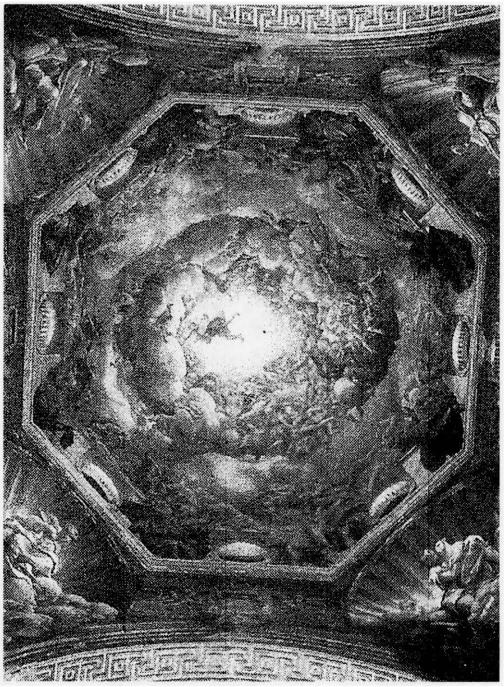


図19　コレッジョ《聖母被昇天》の八角形　パルマ大聖堂

六　ユリウス二世と信長

十六世紀のローマでは、貴人たちも永遠の名声を得るために建築に勤しんだ。リアーリオ枢機卿は、教会とパラッツオを複合した三層中庭形式の盛期ルネサンス建築を予告するパラッツオ・デッラ・カンチェッレリーアを建設し、そのバルコニーに「かくなる事業、かかるゆえの永遠（HOC OPUS –SIC PERPETUO）」というモットーを刻ませた。彼はレオ十世に敗れ教皇にはなれなかったが、この宮殿で歴史に永遠に名を残した。しかしこの永遠の名声をさらに驚くべき構想で実現しようとしたのが、建設者教皇ともいうユリウス二世であった。彼は一五〇三年に教皇に選出されユリウス二世を名乗った時から、明らかに皇帝ユリウス・カエサルを連想させる古代ローマへの強い憧憬があった。彼はヴァティカンのカエサルのオベリスクを新聖堂正面へ移設する構想を立てた（図20）。古代ローマの栄光とキリスト教を、そして皇帝と教皇、ふたりのユリウスを

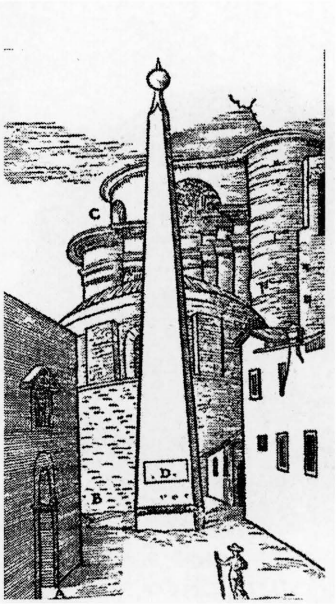


図20　サン・ピエトロのオベリスク、木版画、ベルナルド・ガムッチ『都市ローマの古代四巻』1569年

結びつけられると考えた。そして教皇は自らの墳墓を置くために、一五〇六年にローマのサン・ピエトロ聖堂を新たに作り直すべく着手し、ミケランジェロに自らのユリウス霊廟をまかせた[32]。そして着工記念メダルが制作された（図21）。ユリウスは聖ペテロの墓の移動を禁じ、まさにペテロの墓の上に（図22）自らの墓碑をつくり、大聖堂をペテロとユリウスの聖堂にしようとしたため、恐るべき人物と呼ばれた[33]。つまり新聖堂が自らの墓を置く、自分個人の栄光を称揚してくれる記念碑的なものになることを願ったのである。そしてブラマンテは八角ドームがのるギリシャ十字平面を設計した（図23）。彼はすでにペテロ殉教の地とされる場所に建設したサン・ピエトロ・イン・モントリオ聖堂のテンピエットで、忘れられていた古代ローマ建築が創出した最高の幾何学的空間に倣ったドームを設計していた。そしてこの十字形はキリストの十字架を象徴し、ドームは神が統べる宇宙を象徴しているとした。世界の数学的調和を確信していたルネサンス人ブラマンテは、幾何学が秘める神秘的な力に魅せられ、古代ローマの古典主義とキリスト教を緊密に結びつけたのである。パンテオンのようなドームをかけた大円堂は、古来ローマでは神殿・記念堂をかねた廟であった。また神だけでなく人間である王を神的存在とする考えは古代からあり、例えば、アレクサンドロス大王は生前に神格化され、カエサルは死後公式に神と認められた。ユリウス二世は自分個人への崇敬が自分の人間としての勝利と考えるようになった。そしてドームは地と天を結ぶ天国への通路であり、天国の鍵を預かる教皇としてもっともふさわしい形でもあ

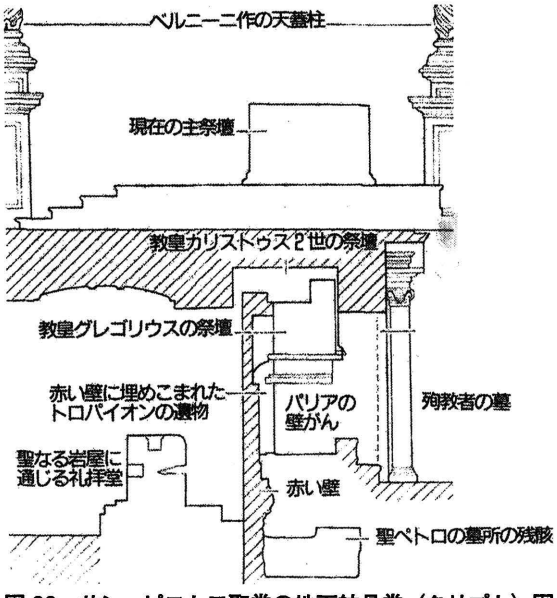


図22　サン・ピエトロ聖堂の地下納骨堂（クリプト）図


図21　新サン・ピエトロ創建記念メダル（完成予想図・ユリウス二世のメダル）、1505年、カラドッソ（クリストーフォロ・フォッパ）作？ミラノ市立考古学・古銭学コレクション、cat.no.284.

ると。そして古代ローマで神の神殿や個人記念堂の屋根を覆ったドームは、自分の遺灰とミケランジェロに依頼した巨大な墓廟を庇護する、このうえない王冠になると考えるようになった[34]（図24）。そして死後神格化された皇帝ユリウスを超えようと、生前にしかも自ら巨大な墓廟を造ろうとしたのであろう（図25）。

そして、ユリウス二世が一五一一年ローマの都市整備工事をひと段落させた翌年に、「最高神ユリウス二世に捧ぐ。教皇は聖なるローマ教会領を拡張しイタリアを開放したのち、適度に配置されることなく犇めきあっていたローマに道路を新設し、拡張して、美麗に飾り、その権威ある統治にふさわしい都市とした。道路監督官ドメニコ・マッシモとジローラモ・ピーキこれを設置一五一二年」という碑文が掲げられた[35]。これと、南下玄興が「安土山ノ記」で信長の偉業を称揚した文、すなわち「王道の衰えたるを起こし、神社仏閣の破れたるを修す。断橋を続き嶮路を平らぐ。…鳳凰は瑞を現し、麒麟は祥を呈すること、今時に非ずして何時ぞや…蓬莱仙境の奇瑞によって寛仁のひと、信長に永遠の容貌が与えられた」を読むと、建設者教皇ユリウスと普請好きの信長が二重写しになる[36]。宣教師から西洋の記念碑の碑文の慣習を伝えられた信長が、ユリウスに倣い、安土城とともに自らの名声を永遠に残すためにこの「安土山の記」を書かせた可能はないのだろうか。

こういうことから信長が抽出した考えは、意外にも当たり前すぎて常人の考えが及ばないサン・ピエトロ聖堂は霊廟でもあり、ヴァ

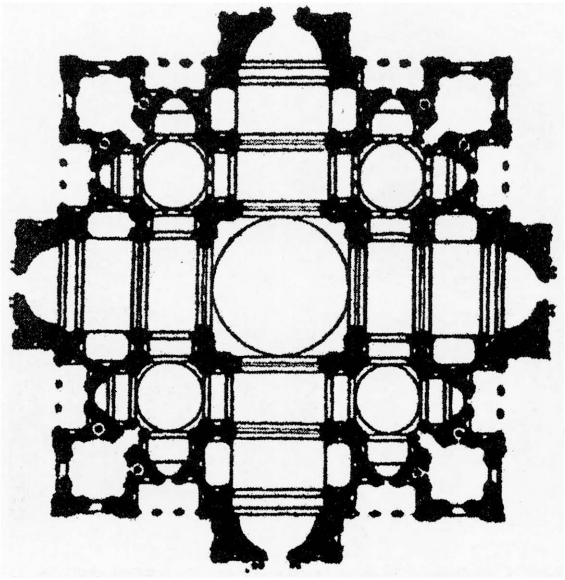


図23　サン・ピエトロ聖堂のドームのブランマンテ案

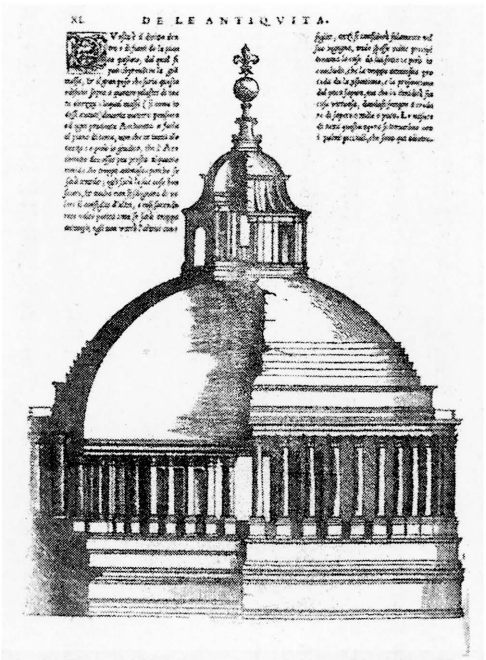


図24　ブラマンテのサン・ピエトロ聖堂のドーム断面図（セルリオ『第三書』）

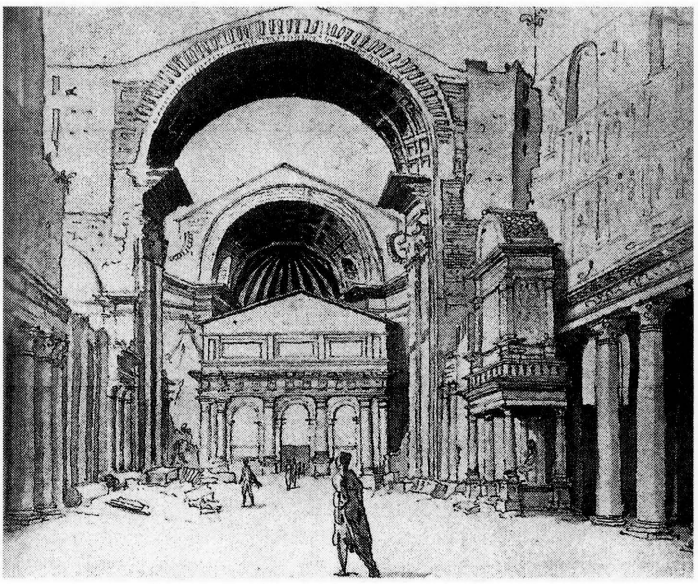


図25　サン・ピエトロ聖堂　再建時(1534-36年)の内部の様子、ヘームスケルクによる素描, Berlin, Kupferstichkabinet, 79 D2A, fol.52

ティカン宮殿は教皇の住居であり、建築物は後世に名を残す壮麗な記念堂になるということだったのではないか。壮麗なドームは天の象徴であり、天への通路でもあるわけだからなおさらだ。そして御大工棟梁岡部又右衛門以言がブラマンテやミケランジェロのように設計し実際に建設した。信長の建設行政官といえる京都町奉行村井貞勝は、内裏の修理、室町将軍第の新営、信長二条城宿館の新造をしたあと安土城完成時に天守拝見覚書を記したが、両者とも本能寺の変で殉死したため技術関係者の資料がないのが惜しまれる。村井貞勝は地階を見ていないようなので、宝塔の仔細も不明である。

結び

ローマの七大教会はある意味で殉教者の霊廟でもあり、ローマの古代遺物である記念柱やオベリスクも皇帝の墓廟でもある。そして高い塔である。信長は、安土城天守の基本構想として、このローマの高い塔にも着想を得たうえで、釈迦の霊廟でもある五重塔を選択した可能性はないのだろうか。五重塔や宝塔は仏舎利を納める塔、そして吹き抜けがあるから教会という縛りから自らを解放し、視点を変えて五重塔や八角円堂は死者の追善のために造営されたとするとどうだろう。西洋では霊廟を要塞城に転用するのも自由である。生前に記念碑的な霊廟を八角形ドームの下に造営しようとしたユリウスに、また遺言で三重塔の下に遺骨を納めさせた白河法皇に、自らの姿を重ね合わせたのではないか[37]。しかし安土山頂の敷地を最大限に活用しても、一階が不等辺八角形平面になる。それでもこれを採用したのは、ユリウスのように自分の事績が未来永劫に記憶される、自らの記念碑的な霊廟建築にするという強い意志があったからではないか。勿論同時に、古代以来天皇家が鎮護国家の象徴としても用いた壮麗な八角形を、また桐紋や八角形の輿と同じく、民衆が一目で高貴な形と分かる八角形を、天下統一のためのプロパガンダとしても採用したとしていいだろう。その地階に将来自らの遺骨を

納める宝塔を設置して地宮とし、その天宮として五階を八角形としたと考えられないだろうか。教会は吹き抜けがあるから教会なのではなく、教会や五重塔は霊廟であるからそれを荘厳するために、広大な吹き抜け空間を創出したのである。霊廟と宮殿のふたつを合体し、五階をサン・ピエトロ聖堂の八角形ドームにも倣い八角円堂としたのではないだろうか。教皇宮殿は大聖堂の側にある。信長の独創性はこのふたつを垂直に重ねたことだ。それゆえ安土城天守は、要塞城ではなく極めて軍事的機能が少ない宮殿・武家殿舎であり霊廟建築となった。そして信長が参拝させたのは、フロイスのいう盆山ではなく、宝塔のある安土城天守そのものだったのではないか。安土城天守は霊廟と宮殿・武家殿舎をひとつの建築物に垂直に合体した、世界でも稀有な複合建築であったと推察できよう。

註

（1）内藤昌「安土城の研究（下）」『国華』第九八八号、一九七六年。

（2）「城館と塔」リチャード・クラウトハイマー『ローマ　ある都市の肖像　三一二～一三〇八年』中山典夫訳　中央公論美術出版　二〇一三年　四二〇―四二九頁。アルブレヒト・デューラー『「築城論」注解』下村耕司編著、中央公論美術出版、二〇一三年。*Turning Point: Oribe and the Arts of Sixteenth-Century Japan*, Edited by Miyeko Murase, The Metropolitan Museum of Art, New York, Yale University Press, New Haven and London 2003, pp.3-8 は宮殿城を castle-palace、秀吉の大阪城を fortress-palaceとし、Mckelway, Matthew Philip: *Capitalscapes, Folding Screens and Political Imagination in Late Medieval Kyoto*, University of Hawa i'i Press, Honolulu 2006, pp.170-179 では、安土城を生粋の要塞城から居住性と象徴性を備えた過渡期の城とし、また権力誇示の城 palacial fortress の先駆としている。内藤前掲論文の四二頁では、西洋の城館宮殿としている。

（3）原陽子「安土城における『天主指図』の宝塔と吹き抜けの存在の可能性―五重塔の造形と宣教師の記録からの試論―」『美術史論集』第一六号　神戸大学美術史研究会、二〇一六年。

（4）宮下規久朗「王権のイリュージョン」『岩波講座　天皇と王権を考える　第6巻　表徴と天皇』岩波書店、二〇〇三年、六九―九九頁。

（5）以後本稿では『使節記』、天正使節を使節と記す。ドゥアルテ・デ・サンデ『デ・サンデ天正遣欧使節記』（泉井久之助、長沢信寿、三谷昇二、角南一郎共訳）雄松堂出版　一九八四年、これは全東洋管区巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノが、四人の使節の手記をすべて整理し手を加えたものを、ドゥアルテ・デ・サンデに命じてラテン語に書き下したもの。

（6）福永光司「八角古墳と八稜鏡」『道教と日本文化』人文書院、一九九八年。

（7）白石太一郎『古墳と大和政権』文春新書、一九九九年。網干善教「八角墳とその意義」『橿原考古学研究所論集五』吉川弘文館、一九七九年。

（8）向井祐介「仏塔の中国的変容」『東方学報』京都第八十八冊、京都大学人文科学研究所紀要、二〇一三年。

（9）濱島正士「塔の源流・中国朝鮮半島の仏塔」朝日百科日本の国宝別冊　国宝と歴史の旅8』朝日新聞社、二〇〇〇年。拙稿、六六―六七頁。

（10）García Gutiérrez, Fernando: *La arquitectura japonesa vista desde Occidente*, Guadalquivir Ediciones, Sevilla 2001. pp, 73―79.

（11）小野佳代『興福寺南円堂と法相六祖像の研究』中央公論美術出版、二〇〇八年。

（12）内藤昌『復元安土城』講談社、二〇〇六年、十六―十八頁、九九頁、

二六二―二六四頁。

(13) フロイス『日本史3』松田毅一・川崎桃太訳、中央公論社、一九七八年二八二―二八五頁。大橋一章・片山直樹編著『興福寺―美術史研究の歩み』『奈良六大寺大観・第七巻興福寺（一）』岩波書店、一九六九年。奈良文化財研究所編『奈良の寺』岩波新書、二〇一三年。松田毅一『天正遣欧使節』一九九九年、講談社、三六三頁―三六五頁には、興福寺の多聞院の英俊の日記の閏正月二十一日の条（一五九一年）に、「大ウス当寺八堂社参、並両門庭見物、中坊ヨリ案内者付了」とある。すなわち、在京中のヴァリニャーノに随行の南蛮人たちが多聞院を来訪した記録である。おそらく使節の四青年も同行し興福寺見物をしたとし、その規模の雄大さを述べている。Hara, Yoko:《El Castillo de Azuchi y la visualización de los ideales políticos de Oda Nobunaga》: *Japón y España acercaminetos y desencuentros (siglos XVI y XVII)*, Satori Ediciones, Gijón, 2012.pp111-123.

(14) ヴォーン・ハート、ピーター・ヒックス『パラーディオのローマ』桑木野幸司訳、白水社、二〇一一年、一三―五〇頁。

(15) García Gutiérrez, Fernando: *MOMOYAMA. La Edad de Oro del Arte Japonés 1573 1615*, Ambito Servicios Editoriales S.A., Madrid 1994. p35.

(16) アンドレー・ペティグリー『印刷という革命』桑木野幸司訳、白水社二〇一五年、五四三―五四五頁。

(17) デ・サンデ前掲書、四一四頁、三九五頁。

(18) ヴァリニャーノ『日本巡察記』松田毅一他訳、東洋文庫、平凡社一九九五年二九三頁、三五一頁。松田毅一『南蛮資料の発見』中央公論社、一九八九年。内藤前掲論文、四三頁。

(19) R・クラウトハイマー前掲書　三七―四七頁、六八頁、三一〇頁。

(20) 石鍋真澄『サン・ピエトロ聖堂』吉川弘文館、二〇〇〇年、十―五一頁。

(21) Vicchi, Roberta: *Las Basílicas Mayores de Roma, San Pedro・San Juan・San Pablo・Santa María la Mayor*, Scala Group S.p.A., Antella, 1999. pp.120-158. 益田朋幸「羅馬中世の美を歩く五日間」『芸術新潮』二〇〇七年、十四―一一六頁。

(22) 稲川直樹・桑木野幸司・岡北一孝『ブラマンテ　盛期ルネサンス建築の構築者』ＮＴＴ出版、二〇一四年、九五頁、一七〇頁、益田前掲書五六頁、六九頁。

(23) 川村やよい「南蛮漆器とキリスト教―スペインに届けられた作品を中心に」『スペイン・ラテンアメリカ美術研究』十八号、二〇一七年。川村やよい「スペイン所在の南蛮漆器について」『国華』一四一五号、二〇一三年。

(24) 稲川前掲書一七六頁。

(25) 桑木野幸司『叡智の建築家　記憶のロクスとしての16―17世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版、二〇一三年、二六六頁。

(26) 石鍋前掲書、六七頁。

(27) デ・サンデ前掲書、三一六―三一八頁、五四五―五四八頁、三〇一頁。松田前掲書『天正遣欧使節』の一六五頁では、イタリア出身の科学者ジャネリオ・トゥルリアーノの案内で、天体の動きや年月日を正確に示す千八百の小球でできた精緻な工作物を見、説明を聞いたとしている。若桑みどり『クワトロ・ラガッツイ　天正少年使節と世界帝国』集英社二〇〇五年、四九頁。

(28) カルタージリ『西洋古代神話図像大鑑【続編】』Ｌ・ピニョリア［増補］、大橋喜之訳、八坂書房、二〇一四年、三六頁、二〇八頁。竹本千鶴「安土図屏風を描き遺したフランドル人」『日蘭学会会誌』第三四号一巻、二〇一〇年。

(29) O'Malley, John W. S.J., Bailey, Gauvin Alexander, Sale, Giovanni. S.J.: *The Jesuits and the Arts 1540-1773*, Saint Joseph's University Press,

2005, p.14.

(30) 立花京子『信長権力と朝廷』岩田書院、二〇〇〇年、一八六―一九〇頁。

(31) 拙稿六五頁。

(32) 稲川直樹「第四章　教皇庁の建築家」と「第五章　ブラマンテとユリウス二世」稲川等前掲書。

(33) 石鍋前掲書　五十八頁。

(34) Martín González, J.J.: *Historia de la arquitectura*, Editorial Gredos, S.A.1973, pp.269-72.

(35) 稲川前掲書　三四〇―三四一頁。

(36) 篠田徹「安土山の記」愛知文教大学地域連携センター文庫所収。

(37) 拙稿七六、六六―六八頁。

【挿図出典】

挿図1、2　『新桃山展大航海時代の日本美術』展覧会図録、九州国立博物館、二〇一七年。

挿図3、9、10、11、12、14、25　R・クラウトハイマー『ローマ』中央公論美術出版、二〇一三年。

挿図4　上田篤編『五重塔はなぜ倒れないか』新潮社、二〇〇八年、『特別展　栄西と建仁寺』東京国立博物館、二〇一四年。

挿図5　『国宝と歴史の旅3』朝日新聞社、二〇〇〇年。

挿図6、7　文化庁監修『国宝』13建造物Ⅰ毎日新聞社、一九八八年、内藤昌「安土城の研究（下）」『国華』第九八八号、一九七六年。

挿図8、22　P・G・マックスウェルースチュアート『ローマ教皇歴代誌』高橋正男監修、創元社、一九九九年。

挿図13、24　稲川直樹＋桑木野幸司＋岡北一孝『ブラマンテ　盛期ルネサンス建築の構築者』NTT出版、二〇一四年。

挿図15、18　O'Malley, John W., S.J., Bailey, Gauvin Alexander, Sale, Giovanni. S.J : *The Jesuits and the Arts 1540-1773*, Saint Joseph's University Press 2005.

挿図16、17　カルターリ『西洋古代神話図像大鑑【続編】』L・ビニョリア［増補］大橋喜之訳、八坂書房、二〇一四年。

挿図19　『パルマーイタリア美術、もうひとつの都』国立西洋美術館、二〇〇七年。

挿図20、21　ヴォーン・ハート、ピーター・ヒックス『パラーディオのローマ』桑木野幸司訳、白水社、二〇一一年。

挿図23　Martín González, J.J.:*Historia de la arquitectura*, Editorial Gredos, S.A.1973.

【付記】本稿はスペイン・セビリア大学二〇一七年五月《Cultural "Symbiosis"》Internacional Research Consortium:Humanities, Ideas, and Power in Motion でスペイン語による口頭発表した内容をもとに、大幅に加筆したものである。

原陽子（はら・ようこ）
神戸市外国語大学院外国語学科イスパニア語学専攻修士課程修了
スペイン・ナバラ大学留学
元姫路独協大学特別教授